

十日堂の封じ水

むかしむかし、山あいの村と隣の村との境に、「十日堂」と呼ばれる小さな堂がありました。その堂の下には、清くも恐ろしい水脈が眠っており、十日に一度だけ湧き出しては、村々の作物と人々の心を潤していました。

ある年、村に大いなる争いが起こり、その水が呪いを呼ぶとの噂が広まりました。恐れた人々は、堂を壊し、水源を土で封じました。

そののち、家々に病や不作が続き、村人たちは「十日堂の水を埋めた祟りだ」と囁き合いました。

やがて時が流れ、ある者が現れました。

その者は、封じられた場所に小さな祠を立て、「ここに十日堂ありき」と記し、もし再び水が必要になれば掘り起こせるようにしたのです。

その祠は、村の境にあり、隣村の領にもかかっていた。

隣村の者は「もっと簡略なものでよい」と言いましたが、その者はあえて立派な祠を据え、「変えなければ変えればよい」と静かに答えました。

そこへ山の民の一人がこう告げました。

「この地の岩は硬く、容易に水は出ぬ。出ても、その水は混じりけのある悪しき水かもしれぬ。飲めば作物を枯らすやもしれぬぞ。」

その言葉を聞いたその者はうなずきました。

「ならば今は掘らずともよい。ただ、この場所を忘れぬよう、印を残しておこう。」
こうして祠は山道の入り口に置かれ、誰もが奥を望むことはできても、足を踏み入れる者はおらぬまま時が過ぎてゆきました。

しかし、山風がささやくのです。

「時が来れば、封じ水は再び湧き出し、良き者の手によって村を潤すだろう」と。